

和歌浦 「旧あしべ屋妹背別荘」

片男波かたおなみの三断橋を渡ると右手に多宝塔、左手が「旧あしべ屋妹背別荘」になる。別荘の後継者である西本直子氏が作成された紹介文によれば、明治天皇を始め各皇族も逗留されたそうであるから、この妹背別荘はおそらく最上の客を迎えるための施設であったのだろう。また、その昔、聖武天皇が和歌浦へ行幸の折、付き人であった山部赤人は歌を詠んだ。海と陸のはざかい、おそらくいまの三断橋のきざわし辺りからのことであろう。

若の浦に 潮満ち来れば 潟かたをなみ 葦辺をさして 鶴鳴たづき渡る

赤人が詠んだ頃の玉津島には、鳥の姿を隠し宿にもなってくれた葦の群背が、その浅瀬や岸边にはびっしりと生い茂っていたのだろう。わたしたち元魔呵魔呵のメンバーがプロデューサーの田村さんに請われ、この四月初め、赤人が立った同じ和歌浦にまみえたときには、しかし、赤人の和歌に感じられるようなおもむきは残念ながら、がいささかもとめられていなかった。そこには廃れた観光地があっただけで、それも地域振興をやろうというほどだから、そのことに少しも驚きはしなかったが、赤人の歌が覚えざ口をよぎったのには我ながら覚念させられてしまった。そのとき赤人とわたしたちの前には、千五百年の時間を橋渡しするかのように、かの歌が歴然と佇んでいた。あたかもそれは、話の内容も筋もあらかた忘れきった映画の、ただラストの映像だけが色濃く焼き付いたのを懸命に手繰りだそうとするわたしたちの覚束ない記憶を嘲笑うかのよう。

しかし、三断橋を過ぎて「旧あしべ屋妹背別荘」の細い散道に踏み入ると、其処はわたしたちにずっと親しい歴史性を感じさせる場所となる。それはテレビや観光などでつとに見慣れた近世の木造建築様式であり、庭の隅にうち捨てられた古井戸や歩幅の狭い踏み石が醸成する人為的な場所である。

この「あしべ屋妹背別荘」が、朗読劇「終景」ラストシーンの公演場所であった。

終景ラストシーン

「終景」とは、今時の演劇タイトルとしてあり得ないタイトルだろう。あまりにも遠く離れたタイトルだと言うほかにどんな言い方があるだろうか。屹立し他を寄

せ付けまいとするようなこのタイトルを観客がどう受け取ったかはわからないが、少なくとも岡本には、当初予定していたタイトル、「ガラスの動物園より」では不足だと感じるところがあったに違いない。かつて岡本は、「ガラスの動物園」が終わるところからこの台本は始まる、と語ったが、それなら、「ガラスの動物園」の「終わり」は何をもって「終わり」なのか、その「ところ」とは何処なのか、そのことがタイトル「終景」が新生する経緯とどう関わるのか、竹内は、これらのことをどうしても考えざるを得ない。「終景」というタイトルを聞いてからここまで、実はそのことからついぞ離れられないでいる。

ふつう、劇の終わりは、その後にくく何か新しい出来事や、別のシリーズが始まることを踏まえて成立する。ところが、岡本の「終景」は単に劇の終わりであって、わたしたちがそれに続く期待や展望を持つことを許さない終わりなのだ。思うに岡本は、これをハッキリさせたかったに違いない。また岡本にはそうしなければならぬ理由があったのだ。

「終景」の脱稿より早く、岡本は「ハンモック」という断章スタイルの台本先に提示していた。そして「終景」は、「ハンモック」の以前から重ねて推敲されており、文字通りラストの破瓜を待っていた。だからこの間の事情をいうと、「ハンモック」と「終景」はふたなりの関係で成立していることになる。片割れでは成り立たないということだ。その関係式は、たとえば「森と木」の関係が十分条件で、「太極図の中の二匹の魚」の関係が必要条件と言えるだろう。「ハンモック」と「終景」、どちらが「森と木」で、どちらが「二匹の魚」かはいま特定できないが（また特定することの意味もない）、この関係式から必要十分条件を満たす解、つまり、次に書かれるであろう台本、が期待されるのはいわずもがなのことであろう。したがって、タイトルをわざわざ変更してまで岡本がハッキリさせたかった意図は、「ハンモック」、「終景」、そして「未生の台本」の三部が上演されるときわたしたちに明らかになる。

そのことをふまえて、わたしたちはテネシー・ウイリアムズ「ガラスの動物園」の終わるところに話を戻そうと思う。

テネシー・ウイリアムズが自身でも述べているが、「ガラスの動物園」は、追憶の劇である。追憶はそれを紡ぐ人を温もりの繭で被い包み、繭は閉じられた小宇宙となる。安住が許されるならそこは安寧に満ちた至福の世界なのだ。だが同時にそ

こは繭の外世界から見れば死の世界になることを忘れてはならない。テネシー・ウィリアムズ「ガラスの動物園」のラストはこうだ。

だっ^ていまは、すさまじい稲妻が世界を照らしているんだ！そのろうそくを吹き消してくれ、ローラーそして、さみうなび……」

ローラはろうそくを吹き消す。

舞台溶暗。(小田島雄志 訳より)

トムが開けていったドアの隙間からは、世界を照らす稲妻の光が射しこみ、灯が消えたらうそくの前でじっと身をかがめたままのローラは、まるで彫像かそのシルエットのよう。ローラは自らの手でろうそくの灯りを消したのだ。それは、母とトム三人で育んだ繭の世界を照らしていた光を消すことであっただが、同時にそれは、ローラが自らのすべてを賭してトムとアマンダに贈った愛の行為でもあった。

その後六十年が過ぎて、岡本秋象と三人の役者が繰り返した劇の位層は、実はテネシー・ウィリアムズが期待した劇の位層とほとんど変わっていない。岡本の「終景」のラストをそのまま再録する。

経めぐる夕日のなかでローラのシルエットがつぶやく。

ローラ 朝早く、わたしが起きる。

思い出が押し寄せる。

箱庭のような部屋。グレーのカーペットの敷きつめられた部屋の奥には薄いカーテンで仕切られた一隅があり、木製のベッドが一台置かれている。枕を背に半身を少し起こした形で横たわる姉の、夏掛けを胸まで引き上げるその仕種は極めて緩やかで、そのシルエットはまるで薄れていく記憶のように揺れている……

「そのシルエットはまるで薄れていく記憶のように揺れている……」のだ。わたしたちは、薄れていく記憶が、ここではすでに思い出ではないことに気付く。そしてこの劇を見る者は、ローラとトムの過去の思い出を追憶し共感に浸ることをもはや許されていない場所にいることに気付かざるを得ない。そこは先もなければ後もない場所である。新しく始まるものがない、本当の終わりとしか言いようのない場所なのだ。それは他者、たとえば死者や未生の者から贈られる世界であって、彼らとの関係が見えなければ贈り物に気付くことも出来ないようなことである。

ここでは、岡本の「終景」は、追憶の劇ではなく、贈られたものをモノリスのよ

うにしるし建てる「決意の劇」だと言っておこう。

上演

この朗読劇には、人をいきなり驚かせるような仕掛けや、世に口さがない連中が声高に喧伝して廻るような出来事は何もない。総じて簡素な舞台があっただけである。なるほど、アパート管理人の場面でこそコミカルな演出も試みられたが、稽古不足の稚拙な演技で成功したとは感じられなかった。とはいえ、そのようなことをあげつらうつもりは毛頭ない。条件さえ整えば、彼らがもっと上手くこなしてしまうことは眼に見えているからだ。それよりも、そのようなことを帳消しにしてなを余りある何事かを彼らが観客に与えたという事実のほうが、実は重要であることを強調しておきたい。

わたしはこの朗読劇の上演に裏方として池宮君ともどもいささかの働きはしたのだが、上演にさいしては、観客としてかけがえのない時間を過ごさせてもらった。その報告でもある。

驚嘆すべきことは、三人の出演者と演出家が観客に伝播したいと願った何事かを観客は確かに受け取った、ということである。そして、現今の演劇にあってこのことがいかにとんでもないことなのか、ということは何度も言っておく必要がある。

現今の演劇上演のほぼすべてがそのようなのだが、見るたびになぜそれをやっているのだろうか？と訝らざるを得ない。それは観劇料が高くて安くても同じであり、出演者の技量が高かろうが低かろうが関わりなくそう思うのだ。見に行くほうは、そのために貴重な時間をさき労力をかけて出かけて行く。まるで上演する側は、そんなことは知らないよ、勝手に来れば良いじゃないといわんばかりの舞台である。演劇はいつからこんなに偉くなってしまったのだろう。このことで思い出すことがある。数年以前、京都の春秋座で上演された朗読劇、「縞子の靴」（ポール・クロードル）の舞台だ。野村万作を始め出演者は歴々の演劇人たちだ。この上演で、万作の存在に大いなる感銘を受けたものの、手の込んだ舞台であったにも関わらず、その上演から伝わってくる何事もなかったのはほとんど詐欺に等しかったのを憶えている。つまり、わたしが言いたいのは、彼らがどれほど高い技量を持っていたにしろ、烏合の衆でしかなかった、ということだ。演劇にあって個々の技量は、その関係する集団を抜きにして語れないし、発頭できないということだ。そして今回の

「終景」は、その意味で、**台本に書かれていない何事か**を客席に発信した。竹内の勝手な想像だが、おそらく演出の岡本は、この上演にそのような期待はなかっただろう、稽古時間も短く、台本の読み込みも不安が残ったと思われるが、そのような厳しい条件の中でも三人の出演者は、役者として何をしなければならぬか、おそらくこの舞台に自らを賭したのだ。そのすがすがしさと勇氣こそが、何事かを伝播する原動力となって、見えない波を贈ることが出来た。それは目には見えないが確かに存在し肉体に感じることでできる波であった。とはいえ、そんな波は感じられなかったなどと言う人もいるだろう、そのような方のためにひとつ置いて置くが、観客は、上演側がその舞台に賭した同じ力量で劇に臨まなければならぬ。でなければ、そんな波は感じられなかったなどと言う資格はないのだ。出演者は、鷺宮テル子・鏡ゆい・吉村隆史郎の三人である。

当日、「終景」の上演に先立って、北岡恵里香さんのダンスが快い時空の流れを引き渡してくださったことを銘記しておかねばならない。

二〇一四年四月二十七日記 竹内哲児